

令和7年度  
**国際交流事業報告書**

はじめに

日本私立大学協会副会長  
国際交流委員会 担当理事・委員長



大阪商業大学  
理事長・学長  
谷岡 一郎

円安によって渡航費用が上昇し、日本から海外に留学する環境は低下しています。加えてアメリカのトランプ大統領が一部大学の予算をカットしたり、ビザの発給を困難にしている結果として、アメリカへの留学を希望する学生の間には、しばかり混乱が広がっているようです。また中国に関しても、国際情勢の変化により送り出し、受入れともに減少傾向が見られます。その反面、ミャンマーやバングラディッシュなどが、ここ数年増加したネパールやベトナムと同様の伸びを見せていますので、留学生総数に関しては、とりあえず順調に推移していると考えてよいでしょう。

今年の12月1日には、私立大学協会の80周年記念の会が催されることになっ

ておりますが、その翌日、12月2日には関連した国際交流イベントがありますので、今から予定を入れておいて下さい。特にタイ、台湾、韓国、インドネシア、モンゴル、ベトナムなどの東南アジアや北東アジア地域とは、70周年時に提携しました包括協定の延長、継続などの文書を交わすことになっていきます。それらの国々からも代表が参加予定ですので、興味のある方々はご連絡下さい。

昨今の学生たちは、海外に行こうという意欲が減少しつつあるように思えます。日本が安全で暮らしやすいこと、AIやオンライン学習の発達によってわざわざ行かなくとも、それなりに一定レベルの学びを進められることなど、学習環境の変化が原因のひとつかもしれません。それでも「百聞は一見にしかず」というように、現地の直接のコミュニケーションでしか得られない気づきは、得難い経験として必ず行って良かったと感じるはず。ともすれば他国も同じだと考える文化や習慣ですが、同じものはずがないとしたもの。違いを認識することは相対的価値観をなくくみ、しいては国際人として活躍するよい訓練ともなりま

編集・発行

日本私立大学協会  
国際交流委員会

〒102-0073  
東京都千代田区九段北4-2-25  
私学会館別館9階

TEL 03-3261-7048  
FAX 03-3261-0769  
https://www.shidaikyo.or.jp

令和8年3月発行

しよう。

国際交流担当を担う者として、送り出す先はまず「身体の安全がある程度以上保障されること」、「衛生レベルが一定に達していること」などを考慮すべき

モンゴル文化教育大学附属高校

モンゴル文化教育大学附属高校が来日  
東京音楽大学で音楽交流と学生生活を体験

当協会と包括協定を締結しているモンゴル私立大学協会の中核校・モンゴル文化教育大学の附属高校が、2025年4月に修学旅行で来日した。同大学および附属高校では日本語が必修科目となっており、生徒たちは日頃から日本文化への関心が高く、今回の訪日を心待ちにしていたという。

4月22日、一行は東京音楽大学を訪れた。まず代官山キャンパスを訪れ、同大学の学生による東洋と西洋の楽器を組み合わせた特別公演を鑑賞。続いて、モンゴルの生徒たちが母

と信じていますが、さらに「自由な学びが確保されていること」もあってほしい要素です。特定対象を批判して逮捕されるような体制の国への留学はむしろ否定はしませんし、その勇気は大切にしてほしいものですが、(特に最初の留学先としては)お勧めできないこともあります。今年度もいろいろな施策が出され、対応に苦慮するかもしれませんが、ご支援・ご協力をどうぞよろしくお願い致します。



バイオリンと琴のコラポレーション曲の披露

国の歌を披露し、音楽を通じた温かな交流が行われた。

その後はグループに分かれ、両国の学生が通訳教員のサポートを受けながら積極的に意見交換し、互いの文化や学校生活について語り合い、理解を深める貴重な時間となった。



モンゴルの曲を歌う学生たち



日蒙の学生交流の様子

午後には池袋キャンパスへ移動し、日本の部活動を見学した。実際の学生生活に触れたことで、生徒たちは日本の学校文化への理解をさらに深め、大きな喜びと刺激を得た様子だった。

今回来日した生徒たちが、将来大学生や社会人となった際にも、日本での経験を良い思い出として胸に抱きながら成長していくことを期待したい。

## VYSA (在日ベトナム学生・青年協会)

### VYSA JOB FAIR 2025

4月19日(土)に、第18回 VYSA JOB FAIR 2025 が開催された。

開会の挨拶で、VYSA会長のゴ・ティ・アイン・トウエツト氏は「VYSAは留学生や若者の活動支援を目的に様々な活動を行っており、その中で就職支援は重要な柱の一つ。このイベントを通じて、自分に合った働き方、自分の力を発揮できる場所に出会えること、そして企業の皆様が、優秀な学生との新たなつながりを生まれることを、心より願っている」と述べた。



挨拶に立つVYSAのゴ・ティ・アイン・トウエツト会長

会場のブースでの企業説明



また、駐日ベトナム社会主義共和国大使館 一等書記官のヴー・ティ・リエン・フォン氏は「日本におけるベトナム人留学生のコミュニティは年々その規模を拡大しており、人数のみならず、質の面においても大きく成長している。VYSA JOB FAIRは、単なる就職活動の場ではなく、学びと交流、自身の成長を促す貴重な機会である。参加の企業と学生が素晴らしい機会となることを願う」と述べた。

参画した株式会社大林組や三谷産業株式会社などの大企業を含め11企業がプレゼンテーションを行い、フェアを重要視していることを感じた。システムエンジニアやIT、コンサルティング、土木

人材派遣など、職種の多様さからベトナム学生との優秀さがうかがわれた。現地参加者も50人弱おり、オンライン参加者を含めると大規模なイベントであることがうかがえた。

## モンゴル私立大学協会訪問について

### モンゴル私立大学協会

2025年春、モンゴル私立大学協会から、会長が変更になったため挨拶に来訪したいとの連絡があったがスケジュールが合わなかった。そのため、この度本協会事務局で出向き、今後の協力的体制の確立と強化について協議することとなった。

7月9日は、モンゴル私立大学協会の中核大学であるモンゴル文化教育大学の郊外施設を訪問した。

同大学は、日本語学科、経済学科、コンピュータプログラム学科、観光学科があり、日本語学科以外でも日本語の授業が必修となっている。学生は、夏休み期間、郊外施設で働きながら、施設を利用する日本人との交流を通じて、日本語能力を高めている。日本で長期インターンシップを経験した学生は、日本のマナーが身につけており、礼儀正しい様子に好感が持てた。

モンゴル文化教育大学の郊外施設



7月10日は、同大学のウランバートル市内の新校舎を見学した。ウランバートル中心部から近く利便が良い。旧校舎は新校舎の向かいにあるのだが、附属高校の授業や大学の授業の一部は引き続き旧校舎で行うそうだ。新校舎は17階立てで、

うち3フロアを同大学が使用する。学生ラウンジや個別相談室が旧校舎よりも広く設置されたことにより、学生からは、大学で過ごしやすくなると好評を得ていた。

その後、モンゴル私立大学協会会長で科学技術大学理事長のネメフバートル氏他執行部の方々と協議した。ネ

メフバートル氏は、「モンゴル教育部がモンゴルの全ての大学を評価し、ランキング結果を公表しようとしたのだが、評価方法が国立大学に有利なため、上から順に国立大学が全て並び、その下に私立大学という偏った結果となった。そのため、協会として申し入れ、発表は中止と



日本人抑留者の慰霊碑で手を合わせる本協会小出秀文事務局長



新校舎の案内をする牧原創一理事長

なった。私立大学も高等教育機関であり、もっと尊重されるべきだと政府に訴えている」とし、当協会の活動や日本の高等教育政策についての質疑応答が行われた。当協会の小出秀文局長は、「私立大学こそが理想の高等教育機関だ。国の発展のために果たしている役割は国立大学に劣らない。国立と私立の格差を解消することが国としての高等教育強化に繋がる」と述べ、日蒙で連携し、私学振興を図ることを申し合わせた。

7月11日は、日本留学経験者及び日本語教員と意見交換を行った。近年、モンゴルで労働や留学先として選ばれるアジアの国は、日本よりも韓国だが、日本文化への関心や日本への憧れを抱く若者も多くなるそうだ。国際社会における日本の存在感を高めるためにも、日本留学試験の在り方やモンゴルの私立大学への日本語教師派遣など、政府の対蒙政策の見直しが必要ではないだろうか。

# IAUP 60周年記念大会

## IAUP 60周年記念大会に見る AI時代の高等教育の再構築

2025年10月13日から15日

にかけて、韓国・ソウルにてIAUP（世界大学総長協会）60周年記念大会およびセミナー・ユアルミーティングが開催された。本大会は、ソウルサイバー大学をホスト校として、世界各国から130名を超える高等教育関係者が参集し、「高等教育の再構築・AI時代におけるイノベーション、包括性、グローバルな協働」を主題に掲げ、多様なセッションが展開された。

IAUPの歴史的節目と再構築への呼びかけ

開会に際し、IAUP事務局長であり



故佐藤東洋士本協会元会長 桜美林大学元総長の功労賞の授与

対談を行う大阪商業大学谷岡辰郎副理事長



大阪商業大学副理事長を務める谷岡辰郎氏は、60周年という節目を「東洋における生まれ変わりの年」と位置づけ、

高等教育が新たな時代に向けて再構築されるべきであると強調した。この呼びかけは、AI技術の急速な進展が教育の在り方に根本的な変化をもたらしている現状を踏まえたものであり、国際的な協働の必要性を改めて認識させるものであった。続いて、功労者表彰があり、日本私

立大学協会元会長で桜美林大学元総長の故佐藤東洋士氏が表彰され、暖かい拍手が送られた。

包括的イノベーションと多言語教育の展望

「グローバル教育における包括イノベーションの推進」をテーマとしたセッションでは、桜美林大学学長の畑山浩昭氏が登壇し、同大学における英語・中国語による学位コースの設置と今後の拡充計画について言及した。これは、言語的多様性を通じた教育の国際化と、入試改革を含む制度的対応によって、時代の要請に応える姿勢を示すものである。

AIと人材育成の方向性

AIの出現が教育の構造に与える影響については、複数の登壇者から活発な議論が交わされた。かつては工学系人材が求められる、その後情報系人材が台頭したように、社会が求める人材像は時代とともに変化する。こうした変遷を踏まえ、今後は汎用性の高い人文・社会系の教育が重要性を増すとの見解も示された。AI技術の導入によって教育の効率性は向上するが、知識の伝達を超えた人間性の涵養は、依然として人間による教育の領

セッションに参加する桜美林大学畑山浩昭学長



域である。

対面教育の価値と大学の役割

大会の最終セッションでは、大阪商業大学理事長・学長の谷岡一郎氏が、オンライン教育の発展を認めつつも、対面教育が持つ情報量と人間的交流の価値を強調した。AIには代替できない教育の本質として、人間性を育む教育の重要性を説き、大学教職員が果たすべき役割の広がりを示唆した。

AI時代における大学の使命

AIと共生する社会において、大学は単なる知識の供給機関ではなく、若者の知性と人間性を育成する場としての使命を担う。AIの発展は、大学教育の再構築を促す契機であり、各大学が未来に向けてどのような人材を育成するかが問わ



パネルディスカッションに参加する大阪商業大学 谷岡 一郎 理事長・学長

れている。IAUP 60周年記念大会は、こうした問いに対する国際的な対話の場として、極めて意義深いものであった。



マラ財団との懇談

## マレーシア教育関係機関

### マレーシア教育関係機関との懇談会について

公益財団法人オイスカから、マレーシア教育関係機関の来日に当たり日本私立大学協会へ挨拶に来訪したいとの連絡があったため、10月16日に懇談することとなった。

最初の挨拶で本協会常務理事・事務局長小出 秀文から「オイスカと長い付き合いがある

り、これからもマレーシアと日本とで友好関係を築いていきたい」と述べた。

次に、地方・地域開発省事務次官のモハド ケア ラズマン、ピン モハメド アヌアル氏は、マレーシアにおける地方・地域開発省の組織と役割とマレーシアの地方の現状と教育体制、日本の倫理観や規律について学んでいきたいと述べた。

マラ公団理事長のワイビー ジータト、ブルフィクリビン オスマン氏は、マラ公団は国づくりに最も大切である人的資源を開発するというところを重要な役割としており、多くの教育施設を保有し約26万人の学生が学んでいると述べた。

UTHM副学長のニクヒ シヤムディン モハド ノール氏は、日本から学ぶのは単に知識や技術だけでなく「精神的な支柱」を得て持ち帰ることが最も重要であり、

ランキングは重要だが二次的であり、最優先すべきは「社会にどう貢献するか」であると述べた。  
最後に、マレーシアとの友好を確かめ、懇談を終えた。



懇談会の記念写真

## 日韓国交正常化60周年記念

### 日韓私大、少子化の壁越え 私大協私高研 日韓国交正常化60周年で公開研究会

本協会国際交流委員会と日本私立大学協会附置私学高等教育研究所は共同で、9月1日に日韓国交正常化60周年を記念した公開研究会を対面とオンラインの併用形式で開催した。両国が直面する少子化や都市への一極集中といった共通の高等教育課題を背景に、私立大学の未来について多角的な視点から議論することを目的としており、関係者190人が集まった。

魯讚容韓国大学法人協議会会長は挨拶で、日韓両国が少子化と地方私立大学の危機という共通の構造的課題を抱えていると指摘した。2015年に締結された日本私立大学協会と同協議会との包括協定に基づき、これまでも学齢人口減少への対応や大学の特化戦略、留学生受け入れなど、実質的な交流を重ねてきた。両国が互いに学び合うパートナーとして、今後も人材育成と教育の未来に向けた協力事業を推進していく考えを強調した。

金相奎泰齊學園法人本部長は、韓国の

私立大学が置かれた現状と将来への課題について講演した。金氏は、少子化・学齢人口減少に加え、高等教育の制度・政策、財政、ガバナンスが私立大学の未来を左右する主要な変数であると指摘。特に、国立大学に比べて授業料が1.9倍高い一方で、学生一人当たりの政府財政支援が0.6倍にとどまるなど、国立大学優位の政策によって格差が拡大している現状を強調。また、高等教育政策における政治の強い介入や、私学関係者が政



泰齊學園 金 相奎 法人本部長

策立案に参画できないシステムが私学の特色の発露を阻んでいると警鐘を鳴らした。特に、大学の登録金引き上げの上限規制が私立大学の財政を圧迫しており、これまでの大学の廃校は学齢人口の減少よりも、経営不祥事による財政的ペナルティの影響が大きいと述べた。

松本麻人名古屋大学大学院教授は、『分断社会』としての日韓における高等教育の現状と課題』と題して講演をした。松本氏は、日韓両国が経済格差、都市と地方の格差、多文化化によるマイノリティとの格差といった「分断社会」の様相を呈していると指摘した。

格差是正のため奨学金制度の拡充が進む中、韓国は給付型奨学金の導入が早く、種類も豊富で進学機会の保障に熱心である。また、両国ともに学生の首都圏集中が顕著で地方大学の窮状は深刻であるが、韓国では社会的弱者や両親もしくは両親のどちらかが外国人である多文化家族の子女向け特別枠が法制化されており、政策の抜本的な変化が目立つ。このことは、政府と私学の合意形成のあり方に疑問を投げかけるものと松本氏は語った。さらに、地方大学の活性化には留学生の誘致だけでなく、卒業後の就職を含めた地域への定着まで見据えることが重要だと提言した。

パネルディスカッション(写真)では、

名古屋大学大学院 松本麻人 教授



森利枝大学改革支援・学位授与機構教授が司会を務めた。森氏は、日韓の高等教育システムが「とても似ているが、この似ていることほど危険なことはない」という言葉を引用し、両国の共通課題への対応策を見出すことを議論の目標に掲げた。

梁鎬錫駐日本国大韓民国大使館首席教育官は、金氏が指摘した私立大学のガバナンス問題や、松本氏が述べた奨学金制度拡充の影響に共感を示した。梁氏は、長らく緊張関係にあった私立大学と政府の関係が、最近では協力関係へと変化しつつあると指摘。その例として、廃校大学の残余財産の一部(15%)が設立者に還元可能になった「構造改革支援に関する法律」や、地方自治体が大学と連携し

て地域発展を牽引する新しいプラットフォーム「RISE政策」に触れた。この政策による、留学生の地方定着を促す地域特化ビザ制度の導入についても紹介した。

一方、西井泰彦同研究所主幹は、日本の私学は授業料の届出制が比較的自由であるものの、政策決定への私学の関与は近年弱まっていると解説。地方自治体が高等教育へ直接支援することが困難な構

造にあるという課題も提起した。

森氏が韓国の大学の入学金廃止について触れると、金氏は、入学金廃止後、大学の財政は減少傾向にあるものの、時間とともにこの問題は取り沙汰されなくなつたと説明した。これに対し、梁氏は、韓国では入学金が授業料の3分の1から4分の1程度であり、私立大学は財政的な打撃を受けたと指摘した。

参加者からの質問に対し、梁氏は、R



パネルディスカッション

ISE政策が地方創生を目的とし、大学が地域の成長エンジンとして機能することを期待する新しいプラットフォームであると説明。西井氏は、地方自治体による私立大学への支援は困難な課題であり、自治体と大学が密接に連携し、人事交流などを含めた協力体制を築く必要性があると述べた。金氏は、2035年以降に直面する18歳人口の急減を前に、国家と私立大学の使命・役割を再定義し、地域社会と大学が連携を強化する必要があると強調した。また、RISE政策は地域の活性化を目指す一方で、大学間の格差拡大につながる可能性も示唆した。

最後に、森氏は金氏の講演資料にあった「日本人の68.3%が

外国人に対して偏見を持っている」という調査結果に言及し、特に若者や高学歴者ほど偏見が高い傾向にあることにシヨックを受けたと述べた。そして、高等教育がこの偏見をなくすために苦勞しながら維持されていることの重要性を強

調した。

同研究会は、日韓両国が共有する高等教育の未来に向け、多様なステークホルダー間の連携と、変化に柔軟に対応できる政策形成の重要性が改めて浮き彫りとなる場となった。

## 国際交流推進協議会

### 留学生政策の動向を協議 私大協議会

### 「国際交流事業の潮流」テーマに

日本私立大学協会（小原芳明会長）は9月24日、対面とオンラインの併用形式で、令和7年度（通算第23回）国際交流推進協議会を開催した。同協会の国際交流委員会（担当理事・委員長・学長）がメインテーマを「国際交流事業の潮流」と定めて企画。留学生に係る国の諸政策について、行政の担当官を招いて協議したほか、各大学での取り組みなどが報告された。198大学から309人（録画視聴を含む）が参加した。

開会にあたり、谷岡担当理事・委員長が協議会参加への謝辞とともに「今後の国際交流の方向性について、文科省の来年度概算要求の内容を踏まえ、そこに示

された政策展開や事業内容などを注視していく必要がある」などと挨拶した。

同委員会委員の高田史男北里大学副学長・国際部長が進行を務め、協議に移った。

はじめに、文部科学省総合教育政策局日本語教育課課長の降籬友宏氏が「日本語教育の現況」と題して講演した。在留外国人と国内の日本語学習者数が近年増加傾向にあることを示し、日本語教育の質の向上を目指して施行された日本語教育推進法に基づく新たな施策について解説。認定日本語教育機関制度や登録日本語教員制度などによる大学への影響について説明した。大学においても、日本語能力試験N2未満の留学生に主として日本語教育を行う別科などは、日本語教育

機関としての認定を受ける必要がある。続いて、同省高等教育局参事官(国際担当) 付留学生交流室長の浦田晴香氏が「高等教育における留学生政策の動向について」と題して講演した。コロナ禍で減少した留学生数は急速に回復し、過去最高を記録しているが、諸外国と比べると留学生の割合はまだ低い状況だと説明。このため、「留学生の戦略的受け入れ」「日本人の海外留学促進」「大学の国際化」を三位一体で進める必要があると述べた。これらの方針に基づき、2033年度までの数値目標として「外国人留学生の受け入れ40万人」「日本人の海外留学生50万人」が設定された。これを受けて、文科省の来年度予算概算要求では、特に



文部科学省総合教育政策局 日本語教育課 降旗 友宏 課長

日本人の海外留学支援を増額要求しているとした。また、優秀な留学生をより多く受け入れるため、一定の基準を満たした学部に対して、収容定員の超過を認める新たな認定制度も創設したとして解説した。

出入国在留管理庁在留管理支援部在留管理課法務専門官の吉田直樹氏は「出入国在留管理行政の現状と取組」と題して、在留資格「留学」をめぐる統計、在留管理の徹底、上陸基準省令の改正等について説明した。外国人留学生の在留者数は過去最高の40万人を超えたとして、不法残留者数は近年低い水準で推移しているものの、今後増加に転じる可能性を注視していると、在留管理の徹底を呼び掛



文部科学省高等教育局 参事官(国際担当) 付 留学生交流室 浦田 晴香 室長



出入国在留管理庁 在留管理支援部 在留管理課 吉田 直樹 法務専門官

けた。

上陸基準省令の改正の説明では、日本語教育機関認定法の施行に対応し、日本語教育を受ける留学生を受け入れる教育機関は、文部科学大臣の認定を受けた「認定日本語教育機関」であることが、在留資格を付与するための新たな要件として上陸基準省令に明記されたとした。また、これまで大学の別科などで認められていた、もっぱら日本語教育を受ける留学生の配偶者や子の「家族滞在」ビザでの入国が、一般の日本語学校と同様に認められなくなった。

事例報告では、関西国際大学理事長・学長の濱名篤氏が「ネットワーク型・経験学習重視のグローバルプログラム」

関西国際大学の国際交流事業」と題して、同大学のアウトバウンド・プログラムの紹介をはじめ、インバウンドの現状や「知の総和」答申後の留学生政策などにも言及した。同大学では「座学より経験学習」を重視し、海外の協定大学とのネットワークを活用した事前・事後学習を含む交流プログラムなどを展開。これらの取り組みを進展させ、グローバル学部を新設し、留学生と日本人学生が共に学ぶ教育を実践している。一方で濱名氏は、日本の留学生政策の現状について、韓国や台湾といった近隣諸国が留学生誘致に積極的な一方、日本では海外留学を志す学生が減少傾向にあることに警鐘を鳴らす。単に留学生を増やすだけでなく、



関西国際大学 濱名 篤 理事長・学長

各大学が独自の強みを見出し、海外大学との連携を深めるなどの戦略の必要性を訴えた。

次に、「留学生との関わり―流通経済大学の国際交流に関わる中で―」と題して、流通経済大学教授・国際交流センター長の尹敬勲氏が、同大学国際交流センターが直面する課題について、具体的な事例を交えて報告した。日本語能力が不十分な留学生が多く、事務的な連絡さえ困難な状況があるため、翻訳機（ポケット）の導入を試みたが、感情やニュアンスが伝わらず、学生指導には限界があったと留学生とのコミュニケーションの難しさを語った。大学運営における留学生の位置づけについて、留学生の増加



流通経済大学 尹 敬勲 教授・国際交流センター長

は職員の過大な負担につながっていると問題提起をした。尹氏は留学生を増やす国の政策と、受け入れ現場の実態との間に大きな乖離があると主張し、安易な留学生増加ではなく、現場の負担軽減や教育の質を重視した体制づくりが必要だと訴えた。

最後に、同協会の小出秀文常務理事・事務局長が「私学における留学生教育の核心は心の教育、魂の教育であり、国際交流事業として生涯にわたる絆を築くことが重要」などと述べて閉会した。



## 留学生インタビュー

### アスリ・ノヴィタ・ヤスミンさん

留学生はどのような経緯で日本に留学するのか？

アスリ・ノヴィタ・ヤスミンさんは、本協会と包括協定を締結しているインドネシア元日本留学生会が運営に携わるダルマ・プルサダ大学を卒業し、現在、日本の大学院で学んでいる。アスリさんに日本語学習のきっかけや留学生活について伺った。

日本との最初の接点は？

家族にとって日本は身近でした。小学校の5年生のときに叔父が日本に留学しました。その叔父が日本のことをいろいろ教えてくれて、特に初音ミクが印象的で、インドネシアにいたときによく聞いていました。叔父は帰国後、日系企業で働いています。他の親戚も日本に留学した人がいて、今は日本で働いています。アメリカやイギリスに行った親戚もいますし、周囲に留学している人が多いです。

どんな高校生活でしたか？

国立の高校で国際プログラムが組まれていました。入学時にある程度の英語能

力が求められます。授業は、プレゼンテーションやレポートは英語で行われます。週に1度、1日中英語で話さないといけない日もあります。先生たちは全員英語が話せますが、どの程度英語で授業をするかは先生次第となっていました。インドネシアでは、海外の映画やドラマの吹き替えがありませんので、英語に慣れたように思います。

高校で日本語を学習しましたか？

英語以外の第2外国語は日本語のみが選択科目としてありました。その授業



ダルマ・プルサダ大学のアスリ・ノヴィタ・ヤスミンさん

で簡単な日本語やひらがな、カタカナを学びました。日本語を選択していた生徒は、300人中50人くらいだったと思います。高校時代は日本語を勉強するといふより、趣味として学んでいました。友達の間には、卒業後、そのまま日本に進学することを希望して、日本語の塾に通っている人もいました。

**インドネシアの大学での専攻は？**

高校は理系コースにいましたが、言語のほうが自分に合いそうと思いました。でも、シェイクスピアとか英文学には興味がなく、中国語も考えたけど、発音が難しいイメージ。それで、日本語を勉強することにしました。親も了承してくれましたが、どこの大学を受けるかについては、ジャカルタにある大学にするように言われました。もしも落ちたらジャワ島内になさいと言っていました。家から近い大学に行つてほしかったようです。でも、結局日本に來ちゃった(笑)。

**インドネシアの大学生の日本語選択の状況は？**

インドネシアの大学には日本語学科を置いている大学がかなりあります。ランキングが高い国立大学にもあって、インドネシア大学の医学科と日本語学科がレベルは同じくらい高いです。

日本語より中国語を学習したほうがいいよという声もありますが、私には中国語の漢字は難しく見えます。でも中国語を話せると給与が高いから人気があります。日本語学科が人気なのはポップカルチャーが人気だったから。韓国語学科は、あまりありません。

**これから学んでみたい言語はありますか？**

英語と日本語は話せるので、韓国語か中国語をやってみたいです。韓国や中国のアニメをそのまま理解してみたいので。

**大学の日本語のクラスの進行状況は？**

ひらがな、カタカナ、挨拶などからスタートしました。その後、です、ます系とかの語尾変化を学びました。高校から勉強していたので、読解のとき、他の学生よりも早く読めたように思います。

履修登録は早いもの勝ちで、いい先生とかいいクラスは、人気があります。誰でも履修はできますが、あまりできない学生がレベルの高いクラスを履修したけど、やっぱり難しいと変更して他のクラスに入ったのを見たことがあります。

日本語の文法は、時制が難しいです。英語の文法は問題なかったのですが…。文法の授業は眠かったです(笑)。初級か

ら中級に上がると、語尾の「ます」を削つて「る」に置き換える、というのが出てきて難しくなります。上級の授業も誰でも取れますが履修する人が少なくなってきました。脱落した学生たちは、「日本社会」や「日本歴史」といった授業を取るようになります。

2年生になると、言語学、文学、社会学、歴史が必修になって、後半になるとそこから専門を選びます。私は文学の授業、特に近・現代詩が面白くて、文化や言葉遣いの違いが興味深かったです。村田さやかさんの「コンビニ人間」をインドネシア語で読んだら面白くて、日本語で読んでみたいなと強く思いました。それ以前に「坊ちゃん」を英語で読んだことはありました。大学時代に授業で最初に日本語で読んだ小説は谷崎潤一郎の「刺青」です。

私は小さいころからずっと日本のアニメや音楽などのポップカルチャーに触れているので新しい単語を学ぶとき、音として聞いたことはあるので、ニュアンスをつかみやすかったです。語学の学習は楽しめないと感じたかも。ポップカルチャーに興味がないと難しかったかもしれないです。

**留学のきっかけは？**

3年生の後半に就職専門の授業があり

ます。通訳、教授法、研究の3つの中から選びます。私は通訳と教授法を選びました。プルサダで教員として働かないかと誘われたのは卒論の口頭試問が終わった時です。その後、プルサダの推選で日本の大学院を受けることになり、インターンなどをやりながら結果発表を待っていました。落ちたら、通訳とか日本語学校の教員とか、日本と関係ないけど商社とかで働くことも考えていました。受かったのが、日本に行きました。

**今の大学院を選んだ理由は？**

近・現代の日本文学を学ぼうと思いました。近代は難しいので、現代文学で同じテーマの先生をJASSOのSTUDY JAPANで探しました。プルサダ推薦の場合、なるべく関東の大学をと言われているので、それも探すときの条件でした。プルサダと協定を結んでいる大学がいいと言われたので、いくつかの大学に応募しました。返事が来ない大学もありましたが、受入れると言ってくれた明治大学に入ることができました。

**生活パターンは？**

授業があるときは、朝起きて、料理や片付けをして、お祈りをして、学校に行きます。授業を受けてから17時に帰ることが普通ですが、20時にお祈りして帰る

こともあります。帰ったらご飯を食べてシャワーを浴びます。修論で忙しかったときは、23時まで学校にいました。

週末はなぎなたのお稽古を受けます。最初の1年は、夕暮れを見に都庁の展望台によく行きました。ピアノ演奏会があったり、富士山がときどき見えたり、楽しかったです。

**記憶に残っている場所は？**

広島です。ちよつと他の都市と雰囲気の違いがありますね。インターンで長野にいたことがあるのですが、雪が積もるのを初めて見ました。そのとき、凍っていると滑りやすいからペンギン歩きをするということを教わりました。大学生活ではグルメ巡りもしました。ハラルでない困るのですがパン屋はOKなので、あちこち行きました。プラネタリウムもいっぱい行きました。東京はプラネタリウムがいっぱいありますね。高校時代に物理の授業を受けていたので、星にも関心があります。

**日本での生活を始めるときに心配だったことは？**

言葉はまあまあ話せるけど、生活費を自分で稼がないといけないことが心配でした。奨学金は出るけど足りないことがわかっていたので、アルバイトが決まっ

てほっとしました。親からの仕送りはゼロです。高校の友達は仕送りを貰っていますが、足りないのでファーストフード店でアルバイトをしています。

日本に来た直後は、大久保のJAS SOの日本語学校の寮に入っていました。6か月間しかいらなかったのですが、アパートを探すのが大変でした。寮の友達たちと情報交換して探しました。保証人は大学の教員にお願いしました。友達の保証人になったこともあります。周りの留学生は、日本語学校の先生や指導教授、先輩にお願いしていました。

**習慣の違いを感じますか？**

食事はそんなに困らないです。日本もインドネシアもごはんが主食でおかずを食べます。ただ味噌汁はユニークだと思います。インドネシアはお水だけです。食べ物、納豆は苦手。パンが好きです。日本のパティシエが作るものはこだわりが強くておいしい。いろんな味わいがあります。

食品を食べて大丈夫かどうかはラベルを見ないとわからないのは文化の違いですね。宗教の関係で、ゼラチン、ラード、ショートニング、そういったものも気を付けなければいけないので。今はバーコードをスキャンすればハラルかそうでないかがわかるアプリがあります。この

アプリは、出始めの頃はあまりうまくいかなかったけど、最近はよくなってきました。

お祈りの場所は、寮にいるときに情報交換をしていました。旅行などで移動中はバスの中で座って行きます。長い旅のときは翌日多めにやるなどの工夫をすれば大丈夫です。

日本に来て驚いたことは、日本人は知らない人に挨拶をしないことです。インドネシアでは目があったら軽く頷くなど、挨拶をします。工事中の場所を通ったら、働いている人に声をかけるけど、日本では黙っている。最初は寂しい感じがしました。

**日本に来る前にやっておけばよかったと思うことは？**

情報をもっと探しておけばよかったです。スマホの会社とか、アパートの探し方とか。入学する前は大学の支援を受けられないので。

**帰国後の予定は？**

プルサダ大学の教員になります。N2の授業を担当する予定です。初級は説明が難しいのでベテランの先生が行います。いつか日本文学の授業をやってみたいです。プルサダ大学で今日本文学を教えている教員は2人だけで少

ないです。言語学の先生は多くて10人います。

\*インタビュア時はこう話していました。が、実際は、N3とN5を担当することになったそうです。

**日本の大学が留学生を受け入れたい場合、秘訣はありますか？**

学部入学だと高校を卒業してすぐ行く人が多いから、インドネシアのインフルエンサーと協力して宣伝をするといいかも。早稲田大学がその手法で有名になりました。日本の大学は授業料が高いので奨学金があったらいいと思います。住む



場所も高くないところを紹介してくれるとポイントになります。寮は高いケースも多いです。インドネシア人の場合、インドネシアの学部を卒業したあとに日本で学部をやりなおすのは時間がかかるから、卒業後に留学する場合は、大学院で

の専門教育や専門学校での技術向上を希望する人が多いです。交換留学は、自費部分も多いので私には難しかったです。寮や飛行機代は出してもらえますが、生活費は自分で用意しないといけないからです。

本協会と包括協定を締結しているモンゴル私立大学協会の中核大学であるモンゴル文化教育大学の牧原 創一 理事長は、日本留学経験があり、長年日蒙の教育交流に携わっている。

この度、元留学生の視点から見る現在の日本についてご寄稿いただいた。

**日本人としてのアイデンティティが失われ、日本文化が消えつつある現代社会**

「日本の礼儀作法文化は素晴らしい。ルールを守るマナーは素晴らしい。他人に気を遣い、思いやる文化は素晴らしい」—— 来日した外国人であれば、誰もがそう感じたことでしょう。

私は1980年代に内モンゴルから来日し、数年後には日本国籍を取得しまし

た。日本の大地を初めて踏んだ瞬間、「なんて素晴らしい国なのだろう」と心から思いました。我々が想像の中で描いていた理想の国が、ここに現実として存在していたのです。

当時の中国には高速道路もなく、個人所有の車やスーパリーの駐車場もありませんでした。街中は一色の紺色の人民服に包まれ、無機質な雰囲気漂っていた時代です。

一方の日本は、大都会から田舎の片隅に至るまで、笑顔での挨拶、礼儀正しさ、マナーが自然に根づいており、その文化の豊かさを肌で感じる事ができました。日本は、人類社会における理想のモデルであると考え思えました。



モンゴル文化教育大学 牧原 創一 理事長

ホテルや旅館、温泉などのサービスも「おもてなし」の心に満ちており、部屋の隅々まで清掃が行き届き、ゴミ一つ落ちていないほどの丁寧さでした。本当に「素晴らしい国」だったのです。

しかし昨日、15年ぶり10年ぶり8年ぶりに日本を訪れた友人や教え子（いずれも日本への留学・就職経験者）たちと再会し、食事を共にしながら雑談をした際、彼らは異口同音に「日本が変わった」と驚いて、ため息をつきました。

彼らが驚いたのは、日本の発展やテクノロジーの進化ではありませんでした。「日本人の笑顔が消えている。礼儀作法が薄れている。マナーが乱れている。ホテルや旅館、温泉の部屋がきちんと掃除されていない。前の宿泊客のゴミがそのままゴミ箱に残っていた。テーブルの下や部屋の隅にゴミが落ちていた。フロントやレストランで日本語が通じない。外国人が増え、中国語が四方八方から聞こえてくる。日本文化に憧れて来日した当時の、あの礼儀正しくサービス精神にあふれた日本の姿は、もうどこにもない」と――。

実際、私自身も池袋駅の百貨店内の和食店で、家族と久しぶりに食事をした際、浴衣姿のウエイトレスが日本語をほとんど話せず、料理の説明も不十分だった経験があります。「せめて和食店から

いは……」という思いがよみがえり、残念な気持ちになりましたが、正直なところ、それが今の現実なのです。

日本は、私の家族の祖国であり、私自身の祖国でもあります。その日本が、これからも世界中の人々にとって、礼儀作法・マナー・道徳に満ちた「憧れの国」であり続けてほしいと、心から願ってやみません。

他文化への敬意を失い、拝金主義が台頭し、道徳やモラルが薄れつつある現代社会においてこそ、日本の礼儀作法文化が求められているのではないのでしょうか。教育の観点から見ても、今こそ日本の礼儀作法文化が重要視されるべきだと思います。

人間らしさが失われつつある現代社会において、日本の礼儀作法文化こそが、もつとも必要とされているのではないのでしょうか。

日本が、日本人としてのアイデンティティと、日本としての文化を失えば、「日本」という存在の意味がなくなり、やがては消えてしまうのではないかという危機感を、私だけが抱いているわけではなく、私です。

モンゴル文化教育大学 理事長

牧原 創一